

## 第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

### 報告書資料 一般-25

学校名・団体名	横浜市立日枝小学校
HPアドレス	<a href="http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/hie">http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/hie</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	まちを素材にした体験活動を重視した 「総合活動」の展開
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校では、重点研究課題として「総合活動（総合的な学習の時間・生活科）」を、昭和59年度より30年以上にわたって取り組んでいる。総合活動では子どもたちがクラスごとに自分たちの住む地域を歩き回る中から学習材や追究すべき課題を決めて1年間追究する活動を行っている。その中で、地域にある施設や人材を自らの足で探し、学習活動に生かすことで、自分たちの生活に密着した活動が生まれ、学習の日常化を図るとともに、地域に対する愛着や、まちの一員としてよりよい生活者として生きていこうとする心情が育つと考えた。また、こうした学習活動を通して学校が地域と積極的にかかわることで、学校と地域との関係性を深め、学校と地域が連携しながら子どもを育てることにつながるのではないかと考えている。</p>	

## 1. 活動内容

- (1) 対象者 1～6年生児童(659名)  
(2) 教科 総合活動(生活科・総合的な学習の時間・生活単元学習)  
(3) ねらい

本校の重点研究テーマである「自ら学びを創り出す子どもの育成」を受け、総合的な学習の時間において「自ら学びを創り出す子ども」を具現化するために、地域の「ひと・もの・こと」と繰り返しかかわることで、子どもたちが学習活動に必要な高い知識や技能を獲得し、自分たちの学習集団にはない高度な専門的知識・技能・経験のある第三者と交流できることで生まれる安心感、「これで自分たちもよりレベルアップできるのではないか」という学習への意欲を高めることができると考えた。さらに、こうした活動を通して、自分たちの活動を支えてくれたことに感謝するとともに、地域に対する愛着を深め、地域の一員としてより豊かな生活を送ろうとする意欲につながることを期待した。

### (4) 取組と期待される効果

- ①各クラスで子どもたちと話し合うなかで自ら設定した学習材と1年間かかわることで、子どもたちが主体的に学ぼうとする姿勢と学習内容の深まりを企図している。
- ②地域の施設や人材と積極的にかかわることで、子どもたちが「ホンモノ」にふれるなかで意欲の高まりや活動内容の深まりを期待している。
- ③授業研究会および研究発表会を行うことで、教師一人一人の指導力を高めるとともに、本校の取り組みを校外に発信していく。とくに総合活動で単元を開発し、学習計画を立てることは、教師のカリキュラムマネジメントの能力を育てることにつながると考えている。

### (5) 活動時期および内容

- 4月から3月までの1年間、各クラスで子どもたちと話し合っ決めて学習材とかかわりながら総合活動の学習を進めていく。

4月 校内研修を行い、本校での取組の方向性やねらいを職員間で共通理解し、単元の立ち上げに関する相談会を開いた。

4～5月 各クラスでの学習材の選定と、かかわっていけそうな施設や人材を探し、学年を中心とした部会で単元計画を立てた。  
その結果、平成28年度の各クラスで以下のような学習材が取り上げられた。

「お囃子」「草木染め」「紙芝居」「大岡川」「地域にある特色のある店」「手造り味噌」など

6～7月 各クラスで活動を行うとともに、全学級で研究授業を行い、子どもたちの学習材に取り組む姿勢や見通しについて検証した。

7～8月 各クラスや学年、全校職員などで、各実践内容について7月までの取組を検証するとともに、9月以降の活動の方向性を探った。また、この時期に地域の施設や人材と打ち合わせを行うことで、今後の活動に見通しをもったり、さらにかかわることのできそうな施設や人材を探して交渉したり打ち合わせを行ったりした。

9～10月 夏休みまでの活動を各クラスでさらに深めるとともに、全学級で2回目の研究授業を行い、学習活動の深まりとそれに伴う子どもの学習に関する資質・能力の高まりを検証した。

11月 研究発表会を行い、全学級の公開授業を通して校外に研究の成果を発表した。その際に研究紀要を配布し、それまでの取組を紹介した。また、文部科学省より視学官を招き、実践に対する指導講評を受けた。

1月 校内授業研究会を開き、子どもの思考を深めるための1時間の授業づくりについて検討を行った。

2月 「日枝っ子まつり(学習発表会)」で各クラスでの取組とその成果を保護者や地域に発表した。

## 2. 成果や子どもたちへの効果

- ①地域の施設や人材と繰り返しかかわることで、その施設や人材のもつ長年蓄積されてきた経験に裏打ちされた専門的な知識や技能や子どもたちに伝えられた。その結果、子どもたちの技術がレベルアップしたり、新たな知識が得られたりすることで活動の深まりがみられた。
- ②地域の人材と繰り返しかかわることで、子どもたちの中に、その人から得られる知識や技能にとどまらない、愛着や尊敬の念が感じられるようになった。子どもたち自らアプローチして学ぶ場をつくろうとしたり、その人についてもっと深く知ろうとしたりする姿勢がみられるようになった。
- ③まちに繰り返し出ていくことで、地域の問題と向き合い、問題の原因や改善点を探ることで、よりよいまちにしていこうとする姿勢が感じられるようになった。

こうした効果が得られた要因として、地域の学校に対する協力性があげられる。子どもたちがかかわろうとした人材や施設のほとんどが快く学習に協力してくれた。これは、学校が古くからまちとともに歩んできたこともあるが、学校が職員をあげて祭礼や運動会などの地域行事に積極的に参加することで、学校自ら地域社会に参加していこうとする姿勢が評価されたものと考えている。また、子どもたち自身もこうした場面にふれることで、より学校や地域に対する見方や考え方を深めていると思われる。